

# マリッジブルーの猫



## 1.

---

それまで その三毛猫は 誰にもなつかなかつたし  
それまで その三毛猫は 誰にも甘えたことが ありませんでした

それまで その三毛猫は たった一人で生きていました  
三毛猫は 猫背なりにとも しゃんと構えて 一人で生きていました

夏の太陽が照りつける公園でも 滑り台の下で 一人お昼寝  
秋の風に揺れる並木道でも 木の葉と戯れ 一人遊び  
冬の雪が積もる街路樹でも ベンチの下で 寒さをしのぎ  
春の花に満ちる河原でも 草花に包まれて ごろごろ

三毛猫は ちっとも さみしくありませんでした  
誰かにかまわれて 自由な時間が取られるぐらいなら  
一人で生きている方が 幸せでした

オス猫たちが 言い寄ってきても 知らんぷり  
大きな魚を持って来て プロポーズしても  
フーと 追い返す

本当に わたしのことを思っているなら わたしに近づかないのが 思いやりってものじゃないの？  
三毛猫は そう思っていました

## 2.

---

ある夕暮れ時 滑り台の上で ぼんやりしていると ベンチに 一人の少年が 座っているのに  
気付きました

その少年は その公園で たった一人 ハンカチで 顔を押さえていました

三毛猫は 遠くから その少年を見ていました

三毛猫は その少年が 頭が痛いのか 泣いているのか 気になりました

三毛猫は 近くから その少年を 見上げていました

三毛猫は その少年が泣いているのが わかりました

そして どれだけ悲しい出来事があったのか 気になりました

三毛猫は その少年の隣に 座っていました

三毛猫は 少年が泣き止むまで 傍にいようと思いました

少年は 三毛猫に 気付きました

少年は 涙を拭くと

「いつからいたんだい？」

と 三毛猫の頭を撫でました

三毛猫は なー と鳴きました

少年は 「ずっと 見られていたのか」 と涙を拭きました

「おまえも一人なんだね」

少年は聞きました

三毛猫は なー と鳴きました

「ほんとうに一人でも寂しくないのかい」

三毛猫は なー と鳴きました

少年は 涙目で笑って 三毛猫の頭を撫でました

### 3.

---

突然 少年は 三毛猫を抱き抱え 歩き出しました

三毛猫が 人に抱えられたのは 初めてのことでした  
自分の言葉が通じる人に会ったのも 初めてのことでした

少年は 家の扉を開けると 「ごめんよ ここで待っていておくれ」 と言って 家の中に入りました

少年が家に入り しばらくすると 母親の大きな声が聞こえてきました  
三毛猫は びくっとして 少し離れて 家の明かりを見ていました  
三毛猫は 少年の言うとおりに ずっと待っていました

夜も遅い頃 三毛猫が丸まっていると 少年が 泣き顔と笑顔で 出てきました

「これから 一緒だよ」

三毛猫は なー と鳴きました  
少年は 嬉しそうに 三毛猫の頭を撫でました

それから 三毛猫は 少年の家で 暮らすことになりました

少年と朝ご飯を 一緒に食べ  
少年が学校に行くと 三毛猫はお昼寝  
少年が学校から帰って来ると 起こされ  
少年の猫じゃらしに たわむれる

日も暮れると 少年と一緒に夜ご飯を食べ  
食べ終わると 少年の膝でうとうと  
夜も深まると 少年の腕枕ですやすや

夏の暑さは 少年の部屋の窓から流れる風で凌ぎ  
秋の肌寒さは 少年に寄り添って  
冬の冷たさは 少年の布団の中に包まり  
春の暖かさは 少年と共に分かち合いました

## 4.

---

そんな毎日が続き 少年は どんどん成長していきます  
三毛猫は 少年をうらやましく思いました

少年には 学ぶことが たくさんありました

生きるすべてのものに 意味があること  
何の意味があるのかわからないものにだって それを必要とする人がいること  
自分が避けたいと思うことだって 自分にとっては必要なこと  
そして すべてが つながっていること

三毛猫が知ることもない多くのことを学び 少年は大人になっていきました  
三毛猫は 少年の成長が 少しさびしくもありました

やがて少年は 青年になり  
家にいるより 外の時間の方が 長くなりました

それでも 家に帰ってくると 青年の膝の上は 三毛猫の場所でした

でも 青年の言葉は 三毛猫には だんだん伝わらなくなりました

青年が読み上げる本  
青年が話す電話での会話  
青年がつぶやく言葉  
青年が発するため息の意味

三毛猫は 膝の上で なー と鳴きました

でも 少年は 頭を撫でてくれませんでした

## 5.

---

いつからか 青年は いつも決まった時間に 電話口で楽しそうに 誰かと話すようになりました

三毛猫は いつも膝の上で 聞き耳を立てていましたが その言葉の多くは わからなくなっていました

ある日 三毛猫は 青年の部屋で きれいな指輪を 見つけました

三毛猫が それにじゃれていると 青年は 三毛猫を 強くしかり付け

三毛猫の開けられない引き出しに それを しまってしまいました

三毛猫は 少年の家に来てから 少年だけを想い続け 何も変わっていません

ただ 青年が もう少年では なくなっただけなのです

やがて 青年は その家を出ることにしました

三毛猫は 青年の身支度を 他人事のように眺めていました

「ほら 行くよ」

青年は 荷物をまとめると 三毛猫が待っていたその言葉を 言ってくれました

三毛猫は なー と嬉しそうに鳴きました

青年は 三毛猫を連れて 新しい家に行きました

三毛猫にとって 青年がいる場所が 自分の家

だから どこでも良かったんです

青年がいれば

引っ越したその部屋は 二人で過ごすには 広いくらいで

三毛猫は 昼寝の場所を決めるのにも 苦労しました

## 6.

---

でも すぐに 同居人が現れました  
それは とてもきれいな女の人  
しかも そのきれいな人は オスのトラ猫も飼っていました

四人で 暮らす部屋はそれほど広くはなく  
結局は また青年の膝の上だけが 三毛猫の居場所になりました

三毛猫が膝の上に寝ていても 青年の横には そのきれいな人がいました  
そして そのきれいな人の膝には トラ猫がいました

青年ときれいな人が 出かけてしまうと トラ猫と二人きりになりました  
トラ猫は 三毛猫に寄りそってきましたが 三毛猫は トラ猫にはまったく興味はありません

きれいな人にも 三毛猫は頭を撫でられましたが 触ってほしくないと思っていました

何故なら その人の指に あの指輪が 光っていたから

ある日 三毛猫が ふわふわの糸の塊の上で遊んでいると そのきれいな人は これまでにない  
ぐらいに怒って 三毛猫を払いのけました

なのに 何日かたつと きれいな人は 網みかけの糸を くしゃくしゃにし 泣いていました  
トラ猫は 相変わらず そのきれいな人の膝の上で 寝ています  
三毛猫は その人の 傍で なー と鳴きました  
きれいな人は 「ありがとう」と涙を拭きました

青年は その日 帰ってきませんでした

その翌日 帰ってきた青年は きれいな人を 抱きしめました  
きれいな人は 青年に 怒って 怒って 泣きました

三毛猫は いつも通り ただそれを 眺めていました

## 7.

---

きれいな人の大事にしていた糸が 青年を温めるマフラーになった頃  
三毛猫は 青年ときれいな人が 結婚することを 知りました

そして 三毛猫も トラ猫と結婚することを 青年の言葉で 知りました

青年が きれいな人と 結婚しても トラ猫と結婚すれば 青年と暮らせる  
きれいな人の猫と 一緒にいれば ずっと自分も 青年と一緒に居られる  
青年も 結婚するんだから 自分も トラ猫と 結婚するしかない

青年は トラ猫との結婚を 喜んでいました

それから三毛猫は 青年の喜ぶ顔が見たくて トラ猫と 一緒にいました  
青年が また頭を撫でてくれるから 三毛猫は トラ猫と暮らすことに決めました

三毛猫は 青年のために 結婚することを 決めました

結婚しようと 決めました

結婚しなきゃと 決めました

結婚しなきゃと

青年と彼女の結婚式の前日 青年は 三毛猫とトラ猫の前で きれいな人に 永遠の愛を 誓いました

「ウェディングケーキだよ」と 青年ときれいな女の方は 三毛猫とトラ猫に 一本のかつおぶしを 差し出しました

オス猫はそれにかぶり付きましたが 三毛猫は見向きもしませんでした

三毛猫が 永遠の愛を誓ったのは 青年だから



## 8.

---

青年ときれいな人が 結婚をする日

トラ猫と取り残された部屋を 三毛猫は 出て行きました

三毛猫は ただひたすら歩き 青年と出逢った公園に 辿り着きました

夏の太陽が照りつけ 秋の風に吹かれ 冬の雪が積もり 春の花に満ちる場所に 三毛猫は戻って  
きました

三毛猫は 空に向かって なー と鳴きました

誰も 聞き取ってくれません

もう一度 なー と鳴きました

涙が出ません

最後に 三毛猫は 小さく なー と鳴きました

その時 三毛猫は 初めて 自分が 人間でないことを 知りました



## 9.

---

それから 何日かして 青年が その公園に 現れました

青年は 大声で 三毛猫の名前を 呼び続けました

声が枯れるまで 三毛猫の名前を 呼び続けました

そして 青年は あの時のように 一人ベンチで 涙を流しました

三毛猫は 心の奥で なー と鳴きました

青年には その鳴き声は 届きませんでした

三毛猫は 最後に もう一度だけ 願いをこめて なー と鳴くのでした

おしまい